

福沢研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第5号 2006年9月30日 発行

目次

*せめて“近代” 内山秀夫	2	*主な新収資料	11
*福沢研究センター所蔵		*主な動き	14
写真データベースの構築 牛島利明	3	*諸記録	15
*講演会・セミナー概要	4		



皮製ケース 縦72mm×横62mm×厚16mm

* アメリカより持ち帰った幼児の写真 *

万延元（1860）年咸臨丸で渡米した折に持ち帰った写真としては、写真屋の少女とともに着流しで撮影したものが有名だが、そのとき単身でも撮影し、また幼い子どもの写真も持ち帰った。ここに掲げたものが、その写真。右下には「WM SHEW/113 MONTG. Y. ST/[SAN]FRANCISCO」とある。ショウの子どものは先述の少女ひとりと言われているので（中崎昌雄『福沢諭吉と写真屋の娘』大阪大学出版会 1996年 p.57）、この幼児の身元はわからない。手にした扇子は福沢のものか。



せめて“近代”

うち やま ひで お
内 山 秀 夫

(福沢研究センター顧問・名誉教授)

福沢諭吉という人との接触は丸山真男さんを通じていた。それは数えたり計ったりする学問としての経済学にいたたまれず、視界を確定できないままに茫然と日を送っていた私をとっつかまえて、有無を言わず放り込む力業を示した石坂巖さんによる政治学強制に発端している。石坂さんは私に近代革命を要求したのであり、丸山さんは政治学は私を拒否しないと教えた。石坂さんにはまつわりついたけれど、丸山さんには接近することはなかった。しかし、丸山さんの福沢考は私に歴史上の人物の存在がもつ意味を思い考えさせた。そこから顔をあげて塾で触れる福沢論を手にとると、そのあまさに私は知的退廃をかぎつけていた。それに抗するように、“せめて近代”とつぶやきながらが身の昏冥と格闘していった。それは福沢がかつてみずからに課した啓蒙と同質の格闘であった。

この悪戦苦闘の過程で、安藤英治さんにつながる丸山系列の人たちと、政治学会を媒介とする日本政治思想史専攻の人たちとの厚い人脈をもつことができた。だが、こうした人たちとの接続は、あくまでも私の世代的体験（最終戦中派）が要求したものであり、私が専攻した戦後政治学を牽引していた比較政治学にはかわりなかった。だが、青年の反乱、少数者の異議申し立て、反戦運動、つまり、「ディスロイヤル」の意味が歴史の現在にクローズアップされてきた。私はそれを《未完の近代》ととっていた。それは、福沢における近代の挫折に通底していないはずはなかった。私のひとり作業としての福沢読解が始まるらしかった。

石坂さんから福沢研究センターの立ち上げの発起人の一人になって欲しいこと、そして設立後には石坂所長を補佐して副所長を担当して欲しいとの誘いを受けたのはいつのことだったか覚えていない。石坂さんの意向は今さらきくまでもなく分かっていたから、私の方向はセンターを開放することにあった。私はセンターの英文表記、Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies にその方向を表わした。本来ならプリンストン大学のウッドロー・ウィルソン・センターのように余計な表現を加えなくとも、国際関係研究所として理解されるのだが、日本の場合は、福沢研究センターは「福沢諭吉研究」センターに凝縮しやすい。その危うさを断ち切るために、福沢研究や慶應義塾史、塾員の事跡調査などをより大きく包摂する「近代日本研究」の“中心”たるべき志の結

集が祈念されたのだった。

この結集の第一段を塾内結衆に見る限り、それはまことに寥々たるものであった。言うなれば、福沢研究はもちろん近代日本研究者の厚みは、塾に関する限り「貧弱」でしかなく、その現実認識こそが福沢研に結衆した人たちの危機感だったのである。その危機感には福沢先生という神輿をかついできた歳月についての虚妄感もあったはずである。

所長をはじめとする紳士的な方々の抱負の実現の裏方をやりながら、私はセンターの開放の段どりを考えていた。それは前述したセンターの開放なのだが、そのためにはセンターの存在を充実することではじめねばならなかった。私はこの存在充実・開放を、東大の明治文庫に重ねていたところがある。

もちろん明治文庫になぞらえようがないにしても、日本近代研究者で明治文庫の恩沢にあずからなかった者はないとすら言えるし、所蔵文献の利用サービスの懇篤は知る人ぞ知る。こうした資料提供としての開放に加えて、学外研究者のセンター関与を積極化していった。何よりだったのは、演説館での講演だった。原則的に講演をしない方でも、あの三田演説館ならば、と引受けて下さった。研究プロジェクトも業績はたとえ出版の形はとれなくとも、研究会活動を通じて塾内外の人脈ができれば、それはそれで以って瞑すべきだと思い切った。福沢と対極にあったが、それだけに負の知的遺産にはならなかった陸羯南を中心とする政教社の研究、明治から戦前昭和に通貫する自由と平等の交差をリベラリズムとデモクラシーの観点から際立たせようとした歴史的解析、こんなプロジェクトが行われていった。こうしたプロジェクト・チームは、センターの大きな資産になったはずだ。ただ問題なのは、こうした重厚な研究プロジェクトをまとめあげる能力が、私を含めて、センター内に育成されていったのか、という点である。

私が副所長・所長時代でも、センターは塾のイベント担当によってエネルギーをすりへらすことが多かった。そして今もそれに大きな変化はない。私と共にわいわいやりながらプロジェクトを楽しんでくれた連中に会うと、この頃のセンターの活動状況をたずねる方が結構多い。センターが怠けるどころかますます努力を重ねていて、その分内向きになっていることが気になっている。



福沢研究センター所蔵 写真データベースの構築

うし じま とし あき
牛 島 利 明

(福沢研究センター所員・商学部助教授)

福沢研究センターでは、塾史に関連する幕末から昭和に至る写真を多数所蔵している。これらの写真の中には、福沢諭吉とその門下生、慶應義塾に関する稀覯写真が多数含まれ、近代日本史研究の貴重な資料でもある。写真資料は、その「画像」という性格からして、適切なメタデータさえ付与すれば、文書資料（史料）に比べて、国際的にもすぐれて一般性を備えたものとなり、専門家でなくとも、また外国人であっても、そこから多くの情報を引き出すことが可能という大きなメリットがある。日本の近現代史の様子を画像として提供することは、世界の研究者にとって比較研究の材料として重要であり、センターが所蔵する古写真をアーカイブし、世界に発信することの意義はきわめて大きいといえよう。

しかし、これまでセンターが所蔵する写真類は、大まかな分類ごとにアルバムとして整理されてきたものの、分類・検索方法が確立していなかったため、塾内外からのさまざまな要望に応じて写真を迅速に選択して提供することが困難であり、また、資料保存という観点からも、経年変化による劣化の進行が危惧されてきた。このため、センターでは、武正恒元事務長、赤尾迪子氏、田口靖子氏らを中心として、数年前から独自に所蔵写真の再整理とデジタル化作業を行ってきたが、昨年度はこの作業をさらに発展させて、デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構（DMC）との協力により、DMC RA 神野潔氏（現武蔵野学院大学）、センター助教授の西澤直子氏を中心として、所蔵写真のデジタル・データベースを構築するプロジェクトを進めた。

センターには、大まかに分類して、①福沢関係写真、②著作・草稿・書簡等、③塾関係者肖像写真、④学生生活風景、⑤建築物（建物・施設・モニュメント・街）という異なるタイプの写真が所蔵されている。プロジェクトでは、これらすべての種類の画像を念頭に置き、タイトルやキーワード、撮影年代、撮影者、被写体、写真のサイズや形態、所蔵者・寄贈者に関する情報など、写真画像を歴史資料として適切にアーカイブするためのメタデータについて検討を重ね、最終的に約35項目を定義し、これに従って従来のアルバムに記載されているデータをあらためて精査した。この作業を通じて、文書資料とは違った画像資料アーカイブ特有の問題、およびメタデータ作成における課題が整理されたという点で、今回のプロジェクトは大きな成果が得られたといえよう。

一連の作業は膨大な時間と労力を必要とするものであったが、データベースの公開ということを前提とした場合、もっとも問題となったのは、画像をめぐる著作権・肖像権・所有権、原写真あるいはその複製の寄贈・寄託者に対する配慮をどのように考えるか、という点であった。著作権・肖像権を尊重することは当然であるが、法的にはこれらの権利が失効していると推定される場合でも、義塾の社会的責任として、画像の公開に際しては、原写真の撮影・所蔵・寄贈者等を可能な限り特定し、事前の許諾を得る努力をすることが望ましいと考えられる。また、写真画像を歴史研究のための資料として利用する場合にも、写真の来歴をできる限り明らかにしておく必要がある。

しかし、現実には福沢研究センターに所蔵されるに至った経路・来歴が不明な写真も多く、また、焼き増しが容易な写真の場合、何がオリジナルかという概念を規定することも難しい。このため、そもそも塾外の人物や機関に公開の許諾を求めるべき写真なのかどうかの判別すら難しいことも多く、昨年度末のプロジェクト終了までに DMC の統合データベースに提供することが可能となった公開用画像・メタデータは、約700件という限定的な水準に止まらざるを得なかった。

今後、写真データベースを有効に機能させるためには、まず画像や被写体をめぐる知的所有権や肖像権、公開に関する社会的な責任等の問題について塾全体での合意形成を図り、質の高いメタデータとともに十分な数の公開可能画像を一点一点積み上げていくことが必要となろう。その上で、他の画像データベースや画像以外の歴史コンテンツとの連携が工夫されれば、デジタル・データベース化によって得られるメリットは飛躍的に向上すると考えられる。

本プロジェクトの成果が、塾内外の歴史写真コレクション所蔵機関によって利用・評価されることにより、歴史的な写真をデジタル・アーカイブする際の標準的な方法論を確立するための一助となることを期待したい。



講演中の橋川武郎氏

日本の電力業を形作った二人の 福沢門下生：福沢桃介と松永安左エ門

きつ かわ たけ お
橋 川 武 郎

(東京大学社会科学研究所教授)

ともに福沢諭吉の門下生であった福沢桃介と松永安左エ門は、日本の電力業のあり方を決定づける、リーダーとしての役割をはたした。没後長い時間が経った今日においても、福沢桃介が「電気王」と呼ばれ、松永が「電力の鬼」と呼ばれ続けている事実は、そのことを端的に示している。

福沢桃介と松永安左エ門の二人は、個人的にきわめて親しい間柄だった。この点について、小島直記の大著『松永安左エ門の生涯』(1980年)は、「桃介は安左エ門にとって、兄貴分、盟友、生涯をつらぬく事業の仲間となる」(75頁)、と述べている。一方、大西理平編の『福沢桃介翁伝』(1939年)は、さらにふみこんで、次のように記している。

「桃介氏が福沢先生(福沢諭吉のこと…引用者)の裏返しであるその同じ着物を、表に返して着たのが、松永安左エ門である。松永氏の得意の逆説法と放言と短気なセツカチと、二六時中寸時もどつとして居られぬ何かして居らぬと気が済まぬレストレスネスな所など、全て桃介氏直伝の流儀ならざるなしである。唯松永氏が桃介氏ほど偽悪を衒はず、不品行を大じらに振舞はぬ所などは、同じ着物でも元に戻つて表に返した福沢先生の御下

りの儀を被て居るからである。即ち同じ着物ながら先生一代と、桃介氏の裏返しと、そのお下りを又表返しに三代の長年月を被たため、大分ボロボロに裂けたり、色の褪せた所はあるにしても兎に角福沢先生の衣鉢の幾部分を伝えて居ることに於て、松永氏の存在も偉なりとせねばならぬ。又其処に松永氏の強い個性のあることを争はれぬ」(190-191頁)。

ほかならぬ電力会社の経営に関しても、福沢桃介と松永安左エ門は連携して、行動した。そのことは、

- ①九州の福博電気軌道、九州電気、博多電灯軌道、九州電灯鉄道(これらの会社はすべて継承性をもつ)において、福沢と松永が同時にトップマネジメントに名を連ねたこと、
 - ②福沢が社長をつとめていた名古屋電灯の経営のたて直しを、松永が遂行したこと、
 - ③いずれも戦前日本の5大電力の一角を占め、互に関係会社でもあった東邦電力(松永)と大同電力(福沢)のトップマネジメントとして、同時代に活躍したこと、
- などに現われている。

ただし、福沢桃介と松永安左エ門は、日本の電力業がいかにあるべきかについては、あい異なる対照的な見解を有していた。福沢が水力開発を第一義的に追求し、電力国営や発送電事業と配電事業との分離を主張したのに対して、松永は水火併用方式を推進し、電力民営や発送電事業と配電事業との統合を提唱したのである。

やがて、福沢桃介の主張は戦時体制下の電力国家管理(1939～51年)に受け継がれ、松永安左エ門の構想は戦後の電気事業再編成による9電力体制(1951年以降、今日では沖縄電力を含めた「10電力体制」)に継承された。つまり、電力国家管理と電気事業再編成という日本電力産業史の2大エポックを、はるか以前の時期に、福沢と松永は見通していたわけである。畏敬の念をこめて、福沢桃介が「電気王」と呼ばれ、松永安左エ門が「電力の鬼」と呼ばれるゆえんである。

(本稿は2006年5月24日に行われた第1回福沢研究センター講演会の概要である。)



講演中の宮本又郎氏

近代大阪をつくった慶應義塾出身の 企業家：ニュー・ビジネスモデルを 開発した2人

— 山辺丈夫と小林一三 —

みやもと また ろう
宮 本 又 郎

(関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授・大阪大学名誉教授)

周知のように福沢諭吉は大阪に生まれ、大阪の蘭学塾・適塾で学んだ。その縁であろうか、近現代の大阪の企業家には慶應義塾出身の人々が少なくない。本講演では、そのなかでも近代大阪の成り立ちに、いや近代日本経済の成り立ちに、大きなインパクトを与えた2人の企業家、山辺丈夫と小林一三についてお話することにした。

山辺丈夫は1851年石見国（島根県）津和野藩士の息子として生まれ、20歳前に上京し西周塾で英学を学んだが、一時、大阪に移り、1873年11月から1年半ばかり置かれた大阪慶應義塾に学んだ。のちロンドン大学に留学、経済学を学んでいる途中、紡績会社設立を計画していた渋沢栄一からイギリスで紡績技術の勉強をすることを要請する手紙を受け取り、方向転換、マンチェスターに転居し、紡績工場に職工として入って、日本人として初めて当時世界最先端の紡績技術を学んだ。明治初年以來、日本ではイギリスから紡績機械を輸入して官営、民営、多数の紡績所が設立されたが、そのほとんどは経営的に失敗していた。これに対して山辺丈夫の見聞、知識

をもとに1883年に設立された大阪紡績会社は経営的に見事に成功した。これが契機となって多数の紡績会社が設立され、江戸時代の商業都市大阪は、東洋のマンチェスター＝工業都市として甦ったのである。

一方、1873年山梨県韮崎の素封家の家に生まれた小林一三は慶應義塾理財科に入り、芝居、文学に熱中する学生時代を送った。卒業後、三井銀行に入るも、不遇のときを過ごしていたが、ふとした経緯で、敷設免許を得ていたものの経営の見通しがたたず放棄されようとしていた箕面有馬電気軌道（現、阪急電鉄）の計画を知り、その実現に関与することとなった。計画沿線は田園地帯であったため、乗客の確保が危ぶまれていたが、小林一三は建売住宅の月賦販売、学校の誘致、動物園の開設、温泉と少女歌劇、ターミナルデパートの開設など、乗客確保のため様々な新機軸を打ち出し、ことごとく成功を収めた。さらに、大阪―神戸間に高速電車路線を敷設、大阪・神戸の有力財界人によって開設されていた先発の都市間高速鉄道・阪神電鉄との競争にも勝利した。鉄道と住宅開発、ショッピング、レジャー、文化・教育を結びつける小林一三の経営手法は、その後の日本の私鉄経営のモデルとなったばかりではなく、高度大衆消費社会への扉を叩くという歴史的役割も演じたのである。

(本稿は2006年6月26日に行われ第2回福沢研究センター講演会の概要である。)

三井財閥を改革した福沢門下生

— 中上川彦次郎と池田成彬 —

う だ が わ ま さ る
宇 田 川 勝

(法政大学経営学部教授)

三井家は、大番頭三野村利左衛門が主導した政商活動によって幕末・維新期の危機を乗り切ることができた。しかし、政商活動はリスクなビジネスであった。結託した政治家・官僚から利権や情報を入手できる反面、彼らからの反対給付的な要求を受け入れなければならず、



講演中の宇田川勝氏

また、政権の交代や政策の転換によって事業経営が脅かされたからである。三井も三野村の死後、政商であるがゆえのジレンマに直面した。明治15年に日本銀行が設立されると、三井銀行の官金取扱い業務は日銀に移管された。また、三井銀行では政商的体質に伴う不良貸出しが累積し、明治24年には京都分店で預金取付けを受けた。事態を憂慮した三井家顧問の井上馨は経営改革の必要性を痛感し、その担当者として中上川彦次郎に白羽の矢を立てた。

中上川は福沢諭吉の甥で、慶應義塾に学んだのち、福沢の援助でロンドンに留学した経験をもつ、気鋭の経営者であった。中上川は三井銀行入りすると、政商的体質を打破するために、①官金取扱い業務の返上、②不良債権の徹底的整理を行う一方、新しい経営路線として工業化政策を打ち出して工業部を設置し、富岡製糸所、前橋製糸所、芝浦製作所、鐘淵紡績、王子製紙などを傘下に置き、工業を基盤とする三井家の財閥形成を企図した。そして同時に、銀行業の近代化と工業会社の経営を担当する人材を高等教育機関に求め、慶應義塾出身者を中心に多数の高学歴者を入社させ、重用した。しかし、中上川の三井改革は理想主義に走りすぎたこともあって、工業部門が業績不振に陥ると、三井同族や古参番頭から反発を受け、途中で挫折した。そして、明治34年に中上川は失意のうちに48歳の若さで死去した。

しかし、三井は、中上川の死後、政商路線を復活させることはなかった。三井財閥は三井銀行・物産・鉱山の三大事業会社を中核に経営多角化路線をとり、第一次大

戦後から昭和初年にかけて発展のピークを迎えた。ただその反面、三井を取りまく経営環境は悪化していった。大正9年の反動恐慌に始まる日本経済の長期不況の中で、肥大化した財閥に対する社会的反感が高まっていったからである。そして、世上の反財閥感情は昭和6年の「ドル買い事件」をきっかけに財閥攻撃に発展し、翌7年3月、三井合名理事長団琢磨が暗殺されるという事態を招いてしまった。三井は財閥攻撃の嵐から自己を防衛するために、再度、経営改革を断行しなければならなかった。そして、その役割を担ったのが池田成彬であった。池田は慶應義塾とハーバード大学の出身者で、中上川時代の三井銀行に入行し、中上川の長女と結婚した。池田は明治42年に常務取締役となって以来、約25年間にわたって三井銀行の最高経営者をつとめた。団の死後、池田は三井合名理事に就任し、昭和8年9月、常務筆頭理事に選ばれると、①三井同族の経営第一線からの退陣、②三井報恩会による3000万円の公共事業・社会事業への寄付、③三井関係企業の株式公開、④営利至上主義の批判があった三井物産筆頭常務安川雄之助の解任、⑤停年制の実施、などを内容とする「財閥転向策」と呼ばれた経営改革を矢継ぎ早に断行した。そして、昭和11年5月、池田は自ら定めた停年制によって三井合名常務理事を退任した。

福沢諭吉は、三井のような富豪は商工立国の国家目標に協力すべきであると主張していた。中上川は三井を政商から近代的財閥へ転身させることで、池田は三井財閥の近代化を図ることで、福沢の「実業立国論」の体現を試みたのである。そして、中上川自身、財閥の専門経営者の先駆けであるとともに、彼が三井銀行時代に採用した高学歴者の多くは、のちに三井内外の各産業分野のリーダーとして活躍した。池田もその一人であった。福沢が念願した慶應義塾出身者の実業界進出を中上川と池田は身をもって実践したのである。

(本稿は2006年7月11日に行われた第3回福沢研究センター講演会の概要である。)

後発工業国における企業家の役割

— 森村市左衛門の思想と生涯 —

おお もり かず ひろ
大 森 一 宏
(駿河台大学経済学部教授)

森村市左衛門（1839－1918）は、福沢諭吉の思想に大きな影響を受けて活躍した戦前期日本を代表する企業家・財界人の一人である。堅実な商家に生まれた市左衛門の人生は、幕末開港の時代に福沢の助言を得て、貿易立国の志を抱いたことで大きく転換する。すなわち市左衛門は、その志を実現するために、明治期に入ると貿易商社森村組とモリムラ・ブラザースを創設して、アメリカ合衆国を中心に陶磁器をはじめとする商品の直輸出を行い、日本製品の販路の拡大に成功する。次いで明治後期になると、近代的な陶磁器・窯業製品の製造を行うために、日本陶器合名会社を設立し、窯業の近代化を推進する礎を築いた。さらに、横浜生糸合名会社、堀越商会など貿易関連会社を含む多数の企業への支援・関与を行った。そして、晩年になると森村豊明会を基盤とした社会文化事業にも力を入れ、「財界の精神的神様」と言われるまでの高い社会的影響力をもつ企業家となった。

そうした市左衛門の経営哲学の特徴は、次の5点にまとめられる。まず1点目は、ナショナリズムに裏打ちされた強い輸出志向である。国際競争力をもつ製品を開発・輸出して外貨を獲得し、国富の増大に貢献したいというのが市左衛門の貿易商社創設の動機であった。2点目は、補助金などに頼らず、政府から独立した経営を行うことを誇りとする精神である。福沢の精神的薫陶を受けた市左衛門は、政府と民間企業の癒着に対しては強い嫌悪感を抱いていた。3点目は、所有よりも経営を重視する立場である。市左衛門は、株の投機などによる資産所得の増加や、多数の企業の重役を兼ねて多額の賞与を獲得する当時の企業家・経営者の行動に批判的であり、自らが関与する事業経営の発展そのものを重視する姿勢を貫いていた。4点目は、輸出市場における信用の重視である。戦前期の日本においては、粗製品の氾濫が輸出の発展を阻害したといわれているが、森村組とモリムラ・

ブラザースは、とりわけアメリカ市場において信用を獲得することを重視して、粗製品の問題にきびしく対応していた。最後は、時代の先取りを心がける経営姿勢である。幕末の動乱期に貿易事業に着目し、流行の変遷が著しいアメリカの陶磁器市場に参入した市左衛門は、時勢を観察した上で、不断に情報を収集・分析して、時代を先取りしていくことが、経営を成功させる重要な要素であると考えていた。

一般に後発工業国の場合、市場の失敗もしくは政府の失敗という事態が起こりやすく、それによって経済成長が阻害される可能性は大きいと考えられる。そうした中において、政府からの独立を唱えつつ、企業家の機会主義的行動にきびしい態度でのぞんだ市左衛門の経営姿勢は、あらためて注目される。森村市左衛門は、日本の経済・産業面における西欧へのキャッチ・アップに大きく貢献した重要な企業家の一人として、評価することができよう。

(本稿は2006年6月3日に行われた第1回福沢研究センターセミナーの概要である。)

近代日本と百貨店文化

— 高橋義雄と日比翁助時代の三越 —

じん の ゆ き
神 野 由 紀
(関東学院大学人間環境学部助教授)

高橋義雄と日比翁助は、ともに明治10年代、慶應義塾で福沢諭吉の教えを受け、明治の後半、三越呉服店の店内改革を進めて近代的な百貨店へと転身させることに尽力した。両者は福沢から強い影響を受け、日本の百貨店草創期を築いた経営者であるが、その2人の個性には対照的な側面もみられた。

高橋は視察で訪れたアメリカの百貨店から多くを学んで帰国、この経験を当時経営難に陥っていた三井呉服店の再建に生かすこととなった。優れた経営センスを持ち、消費社会の到来を予知すると同時に、芸者遊びや茶道など道楽人としても知られる高橋は、自己の趣味の実

現のために実業世界において徹底的に利益の追求をするという趣味人でもあった。明治28年から37年にかけて、三越（当時：三井）呉服店が百貨店に向かうべく改革に着手する中、高橋が特に重要視したのは、人々に消費の欲望をどのようにして生じさせるか、という課題であった。このため、商品の陳列方式の採用、呉服柄の人為的な流行操作に取り組む、という画期的な改革案を実践したが、流行を広めるために芸者を利用するなど、自身の趣味の世界での経験を生かしたアイデアも採り入れている。

他方、高橋の後を継ぎ、百貨店化を遂げた三越呉服店を軌道にのせるために様々な活動を行った日比翁助は、営利を追求する実業の世界に対して抵抗感を抱くという、士族出身者特有の武士道の倫理観の強い人物であった。福沢の「土魂商才」の教えを忠実に守り、三越の経営に際しても、企業の社会貢献を常に意識し、具体的には「学俗協同」という名の下、学際的なネットワークを形成して、多彩な文化活動を展開した。当時の三越は、人々に百貨店という新しい商業空間のイメージを知らしめることが急務であった。営業用PR誌の発行や新たに設置されたデザイン部門などが、当時の三越イメージを形成していったが、さらに日比の「学俗協同」を色濃く反映したのが、一連の児童研究と、流行研究であった。それぞれ諮問委員会が設けられ、会員には各界の著名人、知識人が集められ、積極的な活動が展開された。どちらの研究も単なる商品研究を超え、その研究成果を通して人々に「良い趣味」を啓蒙しようとする傾向が目立った。これらの活動は、日比の目指す社会貢献的な意味合いも大きかったが、その一方で百貨店の創り出す趣味は、結局のところ商品が必ず介在しており、その通俗性ゆえに一般消費者に受容される、という消費文化の特性を浮かび上がらせることにもなった。さらにこの頃の百貨店では美術展、音楽演奏など、文化的イメージを判りやすく演出する催事も積極的に採用された。

このように文化活動を重視しながらも、常にその活動の内容は中庸を指向し、常に直接あるいは間接的に消費につながっていくという「日本型百貨店」は、その後の百貨店にも受け継がれ、近代における文化の大衆化に大きな役割を果たした。そして、初期の三越における消費と文化の接近は、高橋と日比、両者の個性が同時期に

揃ったことで実現したと考えられる。

（本稿は2006年6月17日に行われた第2回福沢研究センターセミナーの概要である。）

1872年の日米関係

— 岩倉使節団とアメリカ —

マーティン コルカット

Martin Colcutt

（プリンストン大学教授・法学部訪問教授）

使節団の構成

1872年1月15日、サンフランシスコに到着した46名の使節団は、全権大使岩倉具視を団長に、木戸、大久保、伊藤、山口の4名の副使、5名の大使随員、10名の書記官、26名の理事官という構成であり、それに随行員が加わった。使節団の中には、明治政府の重要な役職について経験豊富な者もあれば、まだ若い者もいた。若いメンバーは経験が浅いとはいえ、関心は強く意欲旺盛なものが揃っていた。使節団には、行政・政治を始めとして、税制や財務、軍事、教育、産業、交通や商業に至るまで幅広い分野の専門家がいた。岩倉専任の秘書として久米邦武がつき、使節団の記録係に任命された。

公式使節団には他に、50名を超える随行員がいた。彼らの多くは学生や大名だったが、その中には留学生として派遣された5人の少女も含まれていた。米国公使チャールズ・デロング（Charles DeLong）氏と彼の妻ははるばるワシントンDCまで使節団に付き添い、夫人が少女たちの世話役として面倒を見ていた。

使節団の任務と主な目的

1. 明治天皇を首長とする日本政府の修好の意を、（不平等）条約を締結していた国々の政府に伝えること。
2. 条約改正を非公式で議論し、不平等条約撤廃の糸口と日本側がとるべき最善の方策を模索すること。
3. アメリカおよびヨーロッパ各国の近況と動向を視察し、細かい情報収集に従事すること。
4. ネットワーク構築と、西洋諸国において日本に好意

- 的で助けとなるような人々と連携関係を築くこと。
5. 帰国後、明治天皇と日本国民に国外の情勢を報告すること。

サンフランシスコでの歓迎

使節団はカリフォルニアで非常に暖かく、そして友好的にもてなされた。歓迎のための委員会が発足し、市長をはじめウィリアム・ラルストン (William Ralston) 氏、D・O・ミルズ (D.O.Mills) 氏、ウィリアム・シャロン (William Sharon) 氏などの資産家が運営委員になった。使節団の渡米はサンフランシスコ・イブニングニュース (San Francisco Evening News)、デイリー・アルタ・カリフォルニア (Daily Alta California)、サクラメント・ビー (Sacramento Bee)、サンノゼ・クロニクル (San Jose Chronicle) などの有力紙の一面を飾った。使節団は市民主催の祝宴に招かれ、カリフォルニア州兵が一行の滞在するホテル前を行進した。そして、何千人ものサンフランシスコ住民がホテルの前に集まって彼らを歓迎した。そのようなニュースは電報や多数の日刊紙、週刊誌の記事でアメリカ中に広まった。また、5人の「プリンセス」の話も大きく取り上げられた。

サンフランシスコでの活動

使節団は1月15日から30日までの2週間、サンフランシスコに滞在した。この間、岩倉と副使らは、地域の有力者や支持者達とホテルで面会し挨拶をかわしたり、一般市民との歓迎会や集会に出かけたりした。とりわけ、1月24日に開かれ、市民200人が出席したパーティにおいて伊藤が行ったスピーチは大いなる賞賛を浴びた。使節団はサンフランシスコにしながら、ワシントンDCのハミルトン・フィッシュ (Hamilton Fish) 氏と電報で挨拶を交わした。彼らはまた西洋諸国の活動内容に関する情報を集める仕組みも整えた。サンフランシスコだけではなく、オークランドやサンノゼといった周辺都市にも範囲を広げ、学校、工場、養護施設、公園、美術館などの視察を行った。特に、鉱山業に精通するメンバーは、ニュー・アルメイデン (New Almaden) の水銀採掘場にも調査に出かけた。

旅行日程

岩倉と副使らはワシントンDCへの道を急いだ。これ

は、グラント (Ulysses Simpson Grant) 大統領に日本政府からの信任状を提出し、不平等条約の見直しについて議論を進めたかったという意志を考慮すると当然のことである。ワシントンDCへ向かうために、開通したばかりの大陸横断鉄道を走るプルマン寝台車が特別に手配された。しかし、その年の冬の寒さは例年にない厳しさで、寝台車はユタのあたりで吹雪に見舞われた。そのため、一行はソルトレイクのモルモンシティで2週間近く足止めをくらい、ワシントンDCに着いたのは2月29日のことだった。そこで使節団は、グラント大統領や、フィッシュ国务長官、国会議員、そして日本からワシントンDCに駐在していた森有礼らの歓迎を受けた。

ワシントンDCでの条約改正に関する議論

使節団は政府からの信任状を差し出すと、すぐに条約の見直しに関する論議にとりかかった。そして、使節団代表とフィッシュ長官、チャールズ・ヘール (Charles Hale (1831-1882)) 氏の会談は、国務省で毎週月曜日に開かれるのが通例となった。木戸の日記からは、使節団上層部が長時間に渡って、また時には夜遅くまで、この会議の準備のために白熱した議論を展開した様子が見える。数回の会議の後、条約改正のためには全権を委任すると明治天皇が明言した信任状が必要である、ということをついしゅ長官が個人的な見解として述べた。そのため、大久保と伊藤が一旦帰国し、留守政府から正式書類を求めることになった。この決定によって、使節団も予定を繰り下げ、数ヶ月間長くワシントンに留まることになり、その間、政府関連施設、学校、病院、新聞社、有名な史跡などの定期的な訪問を繰り返した。

グラント大統領は、日本からの使節団をもてなすための費用として、議会に5万ドルの特別予算を編成するよう要請した。このような莫大な費用を日本からの使節のために費やすことを大統領が提案し、多くの下院・上院議員が賛同したことはアメリカ側の上層部から見た使節団の重要性を示唆するものである。この予算からの出費の一部は、使節団の5月、6月のフィラデルフィア、ニューヨーク、ニューイングランドへの旅費にあてられた。

大久保と伊藤がようやくワシントンDCに戻ったのは、7月22日のことだった。彼らは米国との条約改正にあたって、交渉条件を満たす信任状を持って渡米した

が、その頃日本側代表团は、ワシントンでの交渉結果が、長期的に見て日本に有利なものになるとは考え難い、と感じ始めていた。使節団の上層部は、日本が西洋的な改革を遂げない限り、本質的な意味で「平等な」条約を欧米の列強と結ぶのは難しいと確信していた。8月6日、使節団はボストンを発ったが、ワシントンで長期滞在したにもかかわらず、条約改正に関しての交渉に大きな進展を見なかったことに落胆していたに違いない。しかし一方で、使節団はその他の様々な分野において日本とアメリカに大きな発展をもたらしたことは事実である。彼らの訪問先は、政府関連施設、特許局、造幣局、アナポリスの海軍学校、ウエストポイントの陸軍学校にとどまらず、工場、学校、刑務所、病院にまで及んでいた。そして、アメリカ政府内の有力者、政財界、報道関係、教育などの分野に影響力を持つ人材とも会う機会があったため、使節団のメンバーが学んだことは大きく、アメリカ側においても日本への関心が強まり理解が深まったといえる。

フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン

ワシントン DC では条約改正の余地がないという結論に達した一行は、次なる目的地をヨーロッパへと移し、当然のごとく道を急いだ。フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストンと過密なスケジュールを短期間でこなし、1872年8月6日、使節団はイギリスに向け船出した。久米はアメリカにおける滞在記録を次のように結んでいる。「桑港ニ着セシヨリ、波士敦ヲ出船スルマテ、米国ヲ経歴シ、実境ヲ目撃シタル情実ヲ簡略ニ言ヘハ、此全地ハ、欧州ノ文化ニ従ヒテ、其自主ノカト、立産ノ財本ト、溢レテ此国ニ流入シタルナリ、…」

(本稿は2006年7月1日に行われた第3回福沢研究センターセミナーの概要である。酒井明夫編。)

◇秋の講演会・セミナー

テーマ「近代企業家と福沢諭吉」

《講演会》「日本的経営者 武藤山治」

川口浩 氏（早稲田大学政治経済学術院教授）

11月7日（火）午後3時半～5時

会場・三田演説館

《講演会》「荘田平五郎と三菱の経営近代化」

武田晴人 氏（東京大学大学院経済学研究科教授）

11月17日（金）午後3時半～5時

会場・三田演説館

《講演会》「会社の誕生」

高村直助 氏（横浜市歴史博物館館長）

12月1日（金）午後3時半～5時

会場・三田演説館

《セミナー》「福沢諭吉の経営者観」

川崎勝 氏（南山大学経済学部教授）

1月27日（土）午後3時半～5時

会場・三田キャンパス大学院校舎4階342教室

*講演会は広く一般の方々を対象とし、セミナーは大学院生レベル以上の方々による研究会の形をとっています。

平成18年1月から8月までに収蔵された資料のうち、主なものを紹介する。

福沢諭吉書幅

【塾員高橋晴子氏寄贈】

■ 七言絶句「学生就実業」

行路何須避世譁 書生到处計輒佳

紅塵市上營々苦 正是泥中君子花

行路何ぞ須いん世の譁しきを避くることを

書生到る処 計輒ち佳なり

紅塵市上營々の苦

正に是れ泥中君子の花

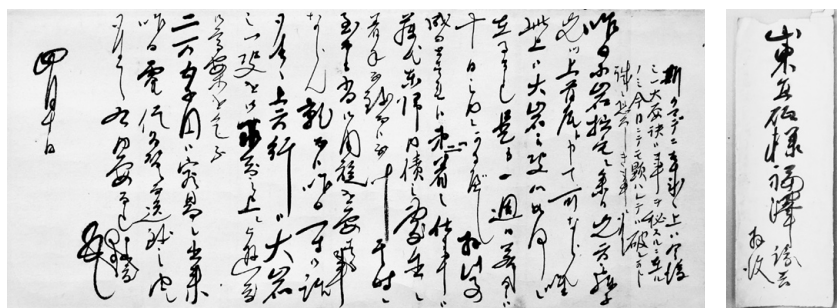
＊関防印は「大幸無幸」。落款印は「福沢諭吉」。

世わたりのためには浮世の喧噪を避けてはならない。青年学徒たるものはいかなる境涯に在ってもりっぱに世わたりの計画を立てることができるはずだ。都会の雑沓汚濁のなかであくせく働いて苦しんでいるその姿は、まさにこれ汚泥の中にすっきり咲いている蓮の花そっくりに見えるではないか（富田正文『福沢諭吉の漢詩三十五講』福沢諭吉協会 1994年）。



福沢諭吉書簡

■ 山東直砥宛書簡 明治13（1880）年4月10日 1通



内容は三菱による高島炭坑買収についての情報を伝え、関西地方への旅行の延期を希望するもの。宛先は欠けているが、これまで大町桂月『伯爵後藤象二郎』に「四月十日の日附を以て、福沢より山東に送りし一書」とあることから、山東直砥宛と推定されてきた。今回購入した書簡には、山東直砥宛慶應義塾領収証（明治14年7月6日付 金額500円）が添えられている。

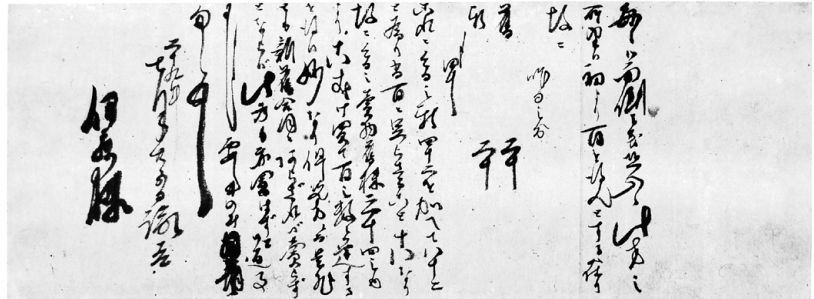
筆跡には同時代の福沢の筆の特徴があるが、若干の疑いも残る。『福沢諭吉書簡集』第2巻（岩波書店 2001年）所収のものと校訂したところ、ほぼ一致したが、「右内要のみ」とある末尾部分がこの資料では「右内要而已申上度」となっている。また一緒に保管されていた封筒の筆は間違いなく福沢の自筆であるが、今までこの書簡に封筒の存在は判明しておらず、果してこの書簡の封筒であるかは断定できない。

主な新収資料

■ 伊藤某宛書簡 明治29（1896）年7月25日 1通

【塾員福田隆三氏寄贈】

宛名の「伊藤」については未詳。内容は株券の購入に関するもの。株の数を100にしたいので、昨日の40に今日の株42を加え、足りない分は「今日之売物旧株」から入手したいという内容だが、株の銘柄など詳細については今のところ不明である。前掲『福沢諭吉書簡集』未収録。

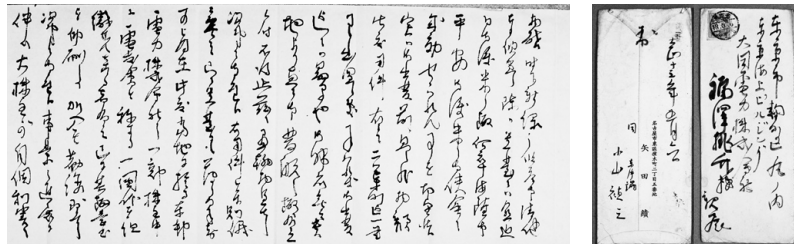


門下生書簡

■ 福沢桃介宛書簡および福沢桃介書簡 計9通

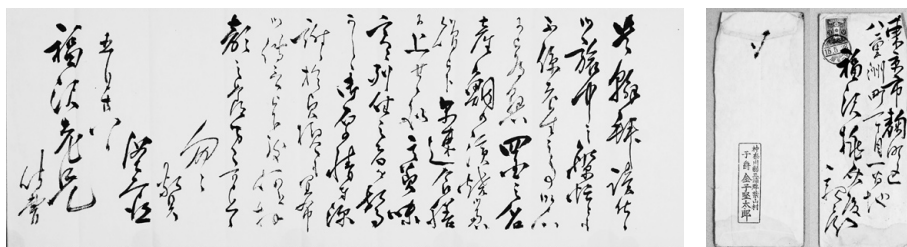
□ 福沢桃介宛矢田績・小山禎三書簡 大正13（1924）年5月6日 1通

東邦電力株式会社の一部の株主が「電友会」なる組織を立ちあげることについて、内実は研究会かもしれないが、こうした組織はとかく対立を生み、重役改選なども控えているので中止した方がいいと忠言したもの。



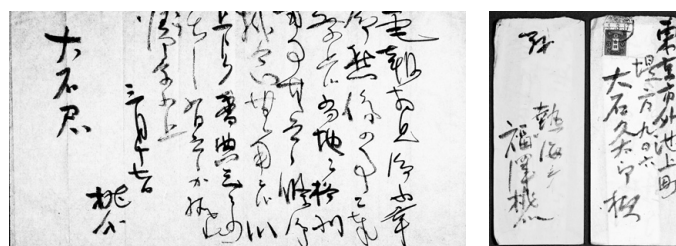
□ 福沢桃介宛金子堅太郎書簡 大正15（1926）年5月28日 1通

鯛の浜焼を贈られたことへの礼状。



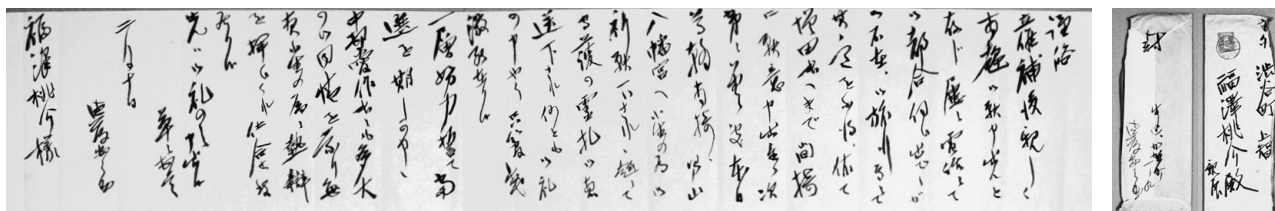
□ 大石久太郎宛福沢桃介書簡 昭和4（1929）年か3月17日 1通

電報で知らされた訃報に弔意を述べ、帰京の予定を述べる。



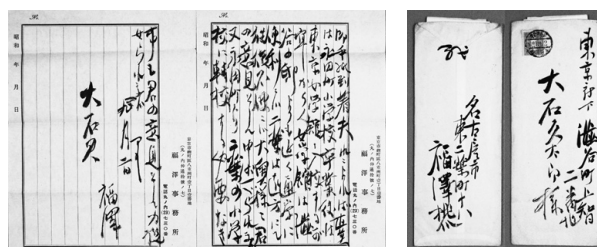
□ 福沢桃介宛佐藤安之助書簡 昭和5（1930）年か2月10日 1通

選挙に立候補するにあたり、八幡宮の霊札恵贈などに礼を述べる。



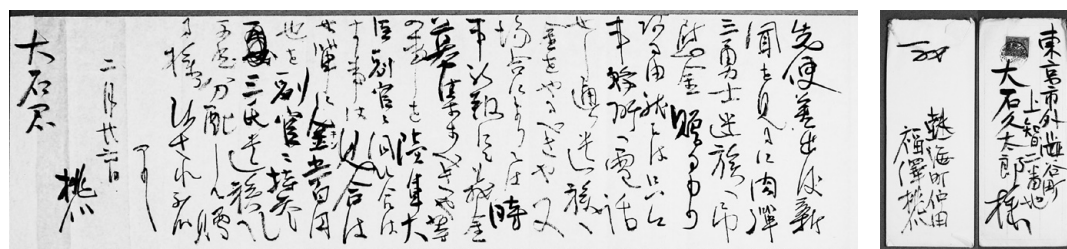
□ 大石久太郎宛福沢桃介書簡 昭和6（1931）年10月2日 1通

孫娘直美の進学先について、東京女学館に入学することを勧める。



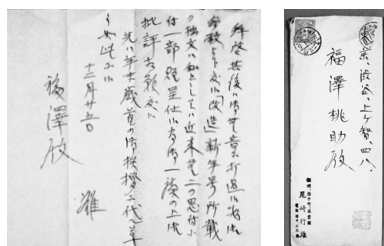
□ 大石久太郎宛福沢桃介書簡 昭和7（1932）年2月26日 1通

肉弾三勇士遺族への献金について、500円を陸軍大臣副官に持参し、配分して贈ってもらうようことづける。



□ 福沢桃介宛尾崎行雄書簡 昭和9（1934）年12月25日 1通

『改造』新年号に掲載する文は「近来無二の思付」ゆえ、一読して批評してくれるよう依頼する。昭和10年1月号に尾崎号堂の「時局漫談（中）」が掲載されている。



□「大石君」（大石久太郎か）宛松永安左エ門書簡 昭和10（1935）年12月18日消印 1通

松永安左エ門にあてた石原笑子の身の上相談の手紙（昭和10年12月11日付）を転送し、然るべく取計ってくれるよう依頼する。宛名は大石宛だが、桃介への斡旋依頼であろう。

□ 福沢桃介宛川上貞書簡 昭和11（1936）年か2月26日消印 1通

季節の便りや今後の予定、「大石」を熱海へ寄こして欲しいことなどを告げる。貞と桃介は大正7年頃から同棲した。昭和7年には桃介は妻の福沢房と隠居生活に入るので、この書簡は大正11年の可能性もある。



主な動き

■ 講演会・セミナー

本年度春学期には、この号に要約を掲載したように（4～10頁）、「近代企業家と福沢諭吉」を統一テーマとした講演会・セミナーと海外研究者によるセミナーを開催した。統一テーマの企画は、福沢門下の企業家達を取り上げて、福沢との関係を意識しながら、近代日本史の流れの中に位置づけるものである。実業にかかわった福沢門下生は多く、彼らについての研究史も厚いことが、講演・セミナーを通して改めて実感されたと言える。聴講者からは、このテーマによる企画をさらに展開してもらいたいとの要望が寄せられており、10頁に掲載したように、今秋も同じテーマで続編を開催することとなった。

■ ワークショップ

今期には、二つのテーマでワークショップが行われた。一つは、研究嘱託田中康雄氏（元群馬県立文書館館長）を講師としてお招きして行われた研究会で、資料の調査・保存・補修について検討した。福沢研究センターには、アルバイトや非常勤嘱託など、さまざまな形で資料整理にかかわっている者がいるが、彼らの中には、資料の収集・保存についての知識を系統的に習得したことがない者もいる。また、関係者の間で資料の整理保存法についての共通基準も定まっていなかった。そこで、この問題に興味がある者が集まり、専門家である田中氏を、5月26日、6月9日、23日の3回に亘ってお招きし、午前午後を通じて研究会を行った。研究会の成果が、直ちに福沢研究センターの業務の改善につながるという訳ではないが、本センターを支える人材の能力と裾野を

広げた意味は大きい。

もう一つは、読書会形式のワークショップであり、今回は、7月14日に早川紀代著『近代天皇制と国民国家』を取り上げて、報告討論を行った。

■ 『近代日本研究』第23巻編集

『近代日本研究』第23巻は、「大学史研究と大学アーカイブズ」を特集テーマとして6編の論考を掲載する予定で編集をすすめている。また自由論題については、5月末日の投稿予告締切りまでに、8名の申請があった（投稿締切りは9月8日）。

■ 資料収蔵スペースの借用

福沢研究センターは、以前より資料収蔵スペースならびに作業スペースがきわめて狭いことに悩んできた。そのような状況の中で、創立150年記念事業として『慶應義塾150年史資料集』の編纂が本格化し、この問題はいつそう深刻なものとなっていた。たとえば、塾内各部署の関連資料を複写したとしても、それを収蔵する場所がなかった。また、資料整理のためのアルバイトを増員しようとしても、その作業スペースを見いだすことは全く不可能であった。

このため、2004年より収蔵スペースを拡大するために諸方に依頼を重ねてきたが、この度、三田メディアセンターのご好意により、同センター旧図書館地階書庫内に約30平方メートルほどのスペース（書架54連）を、2008年度末まで借用できることとなった。有期のことであり、根本的な解決ではないが、このことにより、当座の困難は緩和される状態となった。

■ 『慶應義塾150年史資料集』編纂の進行状況

別巻1『慶應義塾史事典』(2008年刊行予定)は、収録項目約1000項目がほぼ固まり、現在、執筆依頼を発送中である。別巻2『福沢諭吉事典』(2009年刊行予定)は、構成がほぼ固まり、収録事項の選択と収録データの整理を進めている。また、本編となる第Ⅰ期第1巻～第4巻(2010～2013年刊行予定)の編集も、それぞれ独立した編集委員会を設置し、平行して作業をすすめている。

■ 創立150年記念展覧会の検討

現在、創立150年記念事業委員会の部局である式典・イベント委員会が中心となり、2008・09年前後に創立150年にちなんだ展覧会を開催することを計画している。この企画に関して福沢研究センターは、アートセン

ターなどと共に、協力を求められており、それに応えて種々の検討を開始している。特に、展覧会の主題が、福沢諭吉や慶應義塾の歴史にかかわる場合には、展示のストーリーの作成、出展品の選択、カタログの作成などに関して、本センターが担う役割が大きくなることが予想される。

■ 小泉信三博士没後40年記念展示会への協力

塾監局広報室が中心となり「小泉信三博士没後40年記念展示会」を本年12月に開催する企画を進めている。この企画には幼稚舎の神吉創二教諭とともに山内慶太所員が参加しており、今後、さらに他の所員の協力も予想されている。

福沢研究センター諸記録(3月～8月)

■ 諸会議

*平成17年度第3回運営委員会(3月10日:図書館旧館小会議室)

1. 平成18年度予算について
2. 次期所員人事
3. 『慶應義塾150年史資料集』の進捗

*平成18年度第1回運営委員会(6月23日:図書館旧館小会議室)

1. 次期所長・運営委員人事
2. 職員・研究嘱託人事
3. 平成18年度事業

*平成18年度第1回センター会議(5月19日:北館会議室2)

1. 人事
2. 予算
3. 諸活動報告・事業等

*平成18年度第1回執行委員会(6月20日:図書館旧館展示室)

*創立150年記念誌刊行委員会

第2回(4月18日:図書館旧館記念室)

*『慶應義塾150年史資料集』編纂委員会

第12回(3月3日:図書館旧館小会議室)

第13回(4月17日:図書館旧館小会議室)

第14回(6月5日:図書館旧館小会議室)

第15回(7月10日:図書館旧館小会議室)

第16回(8月7日:図書館旧館小会議室)

*『福沢諭吉事典』編集委員会

第1回(3月15日:図書館旧館展示室)

第2回(4月26日:図書館旧館展示室)

第3回(5月31日:図書館旧館展示室)

第4回(6月28日:図書館旧館展示室)

第5回(8月28日:図書館旧館小会議室)

*『慶應義塾150年史資料集』第1巻「塾生・塾員情報集成」編集委員会

第1回(3月14日:図書館旧館展示室)

第2回(6月30日:図書館旧館展示室)

*『慶應義塾150年史資料集』第2巻「教職員・教育体制関係資料」編集委員会

第1回(3月16日:センター内事務室)

第2回(6月19日:センター内事務室)

*『慶應義塾150年史資料集』第3巻「慶應義塾刊行物解題」編集委員会

第1回(3月14日:センター内事務室)

*『慶應義塾150年史資料集』第4巻「諸統計資料集成」編集委員会

第1回(3月16日:センター内事務室)

第2回(6月30日:センター内事務室)

*ワークショップ

第6回(7月14日:東館8階小会議室)

「早川紀代『近代天皇制と国民国家』読書会」報告者: 岩谷、西沢、吉岡

*元群馬県立文書館館長田中康雄氏による資料保存・補修講習会

第1回(5月26日:図書館旧館展示室)

第2回(6月9日:図書館旧館小会議室)

第3回(6月23日:図書館旧館小会議室)

福沢研究センター諸記録（3月～8月）

■ 人事異動

＜研究嘱託＞

新任 田中康雄（平成18年6月1日～平成19年3月31日）

＜事務局＞

新任 酒井明夫（事務長） 6月1日付

■ 来往

- * 明治大学村松玄太氏、橋川文三関係文書を撮影（3月9日）
- * 大妻女子大学比較文化学部平井一弘氏、清岡暎一旧蔵資料を閲覧（4月14日）
- * 韓国KBSテレビ、展示室およびロビー展示を撮影（4月18日）
- * 元慶應義塾塾監局長鎌田義郎氏（5月2日）
- * 大阪大学名誉教授梅溪昇氏、資料調査（5月22日）
- * 宮内庁書陵部福井淳氏ほか2名、資料調査（6月6日）
- * 渋沢史料館井上潤氏（6月6日）
- * 中津市長（6月6日）
- * 東北芸術工科大学非常勤講師杉山真紀子氏（6月20日）
- * 体育会準硬式野球部OB会長菊地栄之助氏（6月20日）
- * 法政大学大学史編纂室和泉守信氏ほか6名見学（7月5日）
- * 客員所員 Marion Saucier 氏（7月13日、8月23日～9月1日）
- * ハッサン王子（ヨルダン元皇太子）、展示室を見学（8月23日）。
- * 韓国KBSテレビ、取材のため来訪（8月29日）
- * 日本テレビ、資料を閲覧（8月31日）

■ 出張・見学

- * 西沢助教授、市古事務長 福沢記念館への資料運搬、

展示換え協力のため出張（3月10～13日：中津）

- * 小室所長、西沢助教授、松崎欣一顧問 資料調査のため出張（3月22日：浜松）
- * 西沢助教授、調査員 資料借用のため出張（3月31日：浜松）
- * 西沢助教授 韓国女性史学会例会で研究報告（タイトル「福沢諭吉の家族像」）、梨花女子大学校、関東大学校、ソウル大学等を訪問（5月19日～23日）
- * 西沢助教授 世界政治学会福岡大会におけるロビー展示打合わせのため渋沢史料館を訪問（6月13日）
- * 小室所長、西沢助教授 神奈川県立歴史博物館を訪問（7月28日）
- * 西沢助教授 資料調査および福沢記念館の資料展示に関する相談のため、中津を訪問（8月1～3日）

■ 講師派遣

- * 西沢助教授 本耶馬溪町の依頼を受けて「福沢諭吉の家族観」という論題で講演（3月12日：本耶馬溪会館）
- * 西沢助教授 慶應義塾高等学校新1年生外部進学者向けに「独立自尊とは何か」という論題で講演（3月25日：慶應義塾高等学校）
- * 西沢助教授 婦人三田会プロジェクトFで「福沢先生の女性論に学ぶ」という論題で講演（4月25日：北館会議室2）
- * 小室所長 福沢諭吉協会土曜セミナーにて「松方デフレ期における福沢諭吉の経済論」という論題で報告（5月20日：交詢社）
- * 岩谷副所長、西沢助教授 東アジア研究所学術大会にて「福沢諭吉の思想における「東アジア」的素地ーその家族論を通してー」という論題で報告（6月24日：大学院校舎東アジア研究所第一共同研究室）

慶應義塾福沢研究センター通信 第5号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2006年9月30日（年2回刊）
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印刷 （有）梅沢印刷所
